

大沢温泉

Ohsawa Onsen
(岩手県花巻市)



岩手県花巻にはたくさんの温泉がある。今回紹介する大沢温泉もそのうちのひとつだ。大沢温泉は巨大な温泉施設である。一種の温泉テーマパークと言っても過言ではない。中心にあるのは湯治屋。これは伝統的な湯治の場所だ。全 57 室 227 人分のキャパシティーがある。次に山水閣という名のホテル。こちらは全 57 室 300 人分のキャパシティーだ。さらに川の反対側には菊水館という名の旅館がある。こちらは全

17 室 60 人分のキャパシティーがある。

これだけ巨大な施設である。したがって、温泉もまたすごい。温泉の数は全部で 7 か所。圧巻は川べりにある混浴の露天風呂「大沢の湯」だ。菊水館には木造風呂の「南部の湯」。山水閣には大浴場と露天風呂の「山水の湯」と貸切の「家族風呂」。中心にある湯治屋にはレトロな内湯の「薬師の湯」と半露天風呂の「豊沢の湯」、女性専用の露天風呂の「かわべの湯」。これを聞いただけで、卒倒してしまいそうなスケールである。

このうち、一般の日帰り入浴が可能なのは、大沢の湯、薬師の湯、豊沢の湯の 3 つだ。湯治屋に宿泊する湯治客もまた、これらの温泉を使う。湯治というのは、主に春から秋にかけての厳しい農作業で疲れた体を癒すために、農民が冬に行うものだとは私は理解している。しかし、現在は温泉をレジャーとして楽しむ客の方が多いであろう。とは言うものの、湯治場としての伝統はまだ健在である。

湯治場の伝統とは、それは低コストということである。とにかく長い期間湯治をするためには、コストが安くなければならない。宿泊は基本的に素泊まりであり、自炊である。客室には暖房器具も炬燵もない。いやあることはあるのだが、それらはすべてオプションである。共同の炊事場ではガスコンロにコインの投入口がついている。コインを投入しないとコンロは使用できない。食堂もあるが、食事を客室まで運んでもらうのもいちいち有料。1 品あたり 54 円が徴収される。コストを抑えたければ、自分で運ぶ。ビールを注文しても、客室へコップは配膳されない。コップはセルフサービスで炊事場から持ってこなければならない。自分のことは自分で。それが湯治場のルールであり、伝統である。そのように私は理解した。

さて、前置きが長くなったが、取材班は数ある温泉の中で、薬師の湯取材することにした。理由は「レトロ」であることに興味をそそられたからだ。迷路のような湯治屋の中を歩き、薬師の湯へ到着する。脱衣室は棚があるのみでシンプルだ。浴室も床のレベルに丸い浴槽が 2 個と、洗い場らしきものが 3 か所あるだけだ。洗い場には一応リンスイシャンプーとボディーソープが置いてあるが、使っている人はいない。浴槽の一方はやや熱めの湯温で、もう一方は適温の湯温だ。

では一体何がレトロなのか。確かに浴槽の縁が床と同じレベルであるというのはいかにも昔風である。それ以上にレトロ感を強調しているのは、タイルであろう。タイルがとにかく小さいのである。今の職人にこんな小さいタイルをきれいに工事できる能力はあるだろうか。いや能力はあっても手間がかかりすぎるので、やってもらえないであろう。東京の銭湯でも古い銭湯はタイルが細かい。こういった小さいタイルは50年以上前のものに違いない。耐朽性もさることながら、しっかりと掃除と手入れがなされている証だ。

ちなみに薬師湯は、アルカリ性単純温泉（低張性アルカリ性高温泉）で、神経痛、筋肉痛、関節痛、五十肩、運動麻痺、関節のこわばり、うちみ、くじき、慢性消化器病、痔疾、冷え性、病後回復期、疲労回復、健康増進に効くという。

浴槽に入りながら上を見ると、天井が高いことに気付く。2層ほどの吹抜になっており、露天風呂ではないが、解放感はある。湯治はちまちまとせっかちに楽しむものではない。そう教えられたように感じた。東北の湯治場、恐るべしである。

DATA

名称	大沢温泉
所在地	岩手県花巻市湯口字大沢
電話	0198-25-2315（湯治屋）、0198-25-2021（山水閣）、0198-25-2233（菊水館）
営業時間	要確認
定休日	無休
入浴料	宿泊者は無料
サウナ	なし（薬師の湯）
サウナ内のテレビ	なし（薬師の湯）
取材日	2017年4月某日
取材	銭湯愛好会東京支部